

福祉文化通信

～well-beingへの道～

日本福祉文化学会事務局 〒165-0026 東京都中野区新井 2-12-10 芸術教育研究所内 Tel/Fax: 03-5942-8510 E-mail:fukushibunka@lagoon.ocn.ne.jp

2012.12.15 vol.70

●発行者／広報委員会
稲田泰紀 安倍大輔 河西正博
関矢秀幸 馬場 清
●制作：山河／印刷：飛来社

研究委員会主催 第2回福祉文化 よもやまゼミナール開催報告

福祉文化学会らしい研究のあり方を探る

去る9月15日、第2回福祉文化よもやまゼミナールが行われました。今回は「福祉文化研究の対象と広がり」をテーマに、研究委員会担当理事でもある國光登志子さんから報告がありました。本報告は、『福祉文化研究』（1992年から2004年）に掲載された論文を分類整理し、その対象の広がりについて分析したものです（詳細は國光登志子「福祉文化研究の対象と広がり」を参照）。立正大学社会学部編『福祉文化の創造』ミネルヴァ書房、2005年参照）。

議論は福祉文化研究のあり方についてまで及び、研究者と対象という関係性をとらぬ枠組みや質的研究、量的研究とも異なる第三の方法？についても考える必要性があるので



報告する國光登志子さん

一番ヶ瀬康子氏追悼セミナーと偲ぶ会のご案内

「追悼セミナー」へのご出席をお待ちいたしております。
期日：2012年12月23日（日）午後2時から5時（当日ご出席歓迎です）
会場：立教大学池袋キャンパス太刀川記念会館
「偲ぶ会」は追悼セミナーが終了後、午後5時30分から8時 セントポールズ会館で行います。なお、「偲ぶ会」出席については、食事の用意が必要ですので、至急申し込みをお願いします。

《申し込み先》日本福祉文化学会事務局まで
*非会員の方もご出席は可能です。おさそい合わせの上ご出席ください。一番ヶ瀬康子氏「追悼セミナー」および「偲ぶ会」の内容や会費は、同封のチラシをご覧ください。
追悼セミナーでは学会の設立当初から一番ヶ瀬前会長とともに歩んで来られた方々からお話が伺える貴重な機会です。ぜひお出かけください。

北陸ブロック 現場セミナー 開催報告

11月23、24日の両日、新潟県長岡市小国地域を会場に「全ての人が買える物に参加できる地域づくり・文化づくりを考える」と題し福祉文化現場セミナーを開催しました。当日は地元の方も含め27名が参加し、シンポジウムを行いました。二日目には、小国住民有志がお金を出し合って開設した「山の駅おぐに」もったいな「村」直売所などを見学しました。買い物支援に関係する団体のそれぞれの役割の明確化と合わせて、地域のつながりの再構築などを考えるきっかけとなりました。
詳細はホームページに掲載しておりますので、ご覧ください。



シンポジウム後参加者で記念撮影

2012年度 韓国福祉文化セミナーのお知らせ

久しぶりに韓国での福祉文化セミナーを企画しました。多くの方のご参加お待ちしております。

期日／2013年2月7日(木) 8日(金) 9日(土) ご予定ください。

*詳細は同封のチラシをご覧ください。お申し込みは期日厳守をお願いいたします。

2012年度の 会費納入を お願いします

学会の活動は100%、皆さんの会費で賄われています。会費納入にご協力ください。すでにご納入の皆様には心より感謝申し上げます。会費督促の案内が入っていた方は、恐縮ですが会費納入につきまして、できるだけ早めに手続きをお願いいたします。

来年度の全国大会は東京で～す!! 実行委員会がスタート

2013年度の第24回全国大会in東京は、立教大学(池袋キャンパス)を会場に予定し、実行委員会をスタートしました。実行委員は関東ブロックの会員から公募、すでに3回の実行委員会を行いました。大会会長は河東田博会長、実行委員長に島田治子副会長、実行副委員長に梅津迪子理事、事務局長に馬場清理事を選出しました。開催期日や大会テーマは現在調整中。
来年の東京大会では、3月の将来構想委員会の意見具申を受けて、今後の学会の全国大会についての基本的フレームになるようなアイデアを模索中です。
学会の全国大会のあり方にご意見のある方はご一報ください。
《学会事務局》メールアドレス：fukushibunka@lagoon.ocn.ne.jp 電話&fax 03-5942-8510

新会員紹介

2012年11月20日までに入会された方のお名前と所属ブロックをお知らせ致します。
個人会員：山口 道宏、
結城 俊哉（関東）

日本福祉文化学会 第23回全国大会を終えて



河東田会長挨拶

日本福祉文化学会第23回全国大会が、9月29・30日に「21世紀の地域の絆と福祉を考える」のテーマのもと倉敷市で開催された。2日間で約200人の参加をいただき、熱心な研究活動が繰り広げられた。
今回の全国大会の特徴として2点を挙げたい。まずは、倉敷にこだわった企画としたことだ。倉敷は、古き伝統と新しい息吹・文化と産業が交差する町だ。もちろん観光地としての知名度もある。この大会では、倉敷の町並み保存、地場産業としてのジーンズ、当事者がいきいきと輝く地ビール工房、さらには瀬戸内の離

島の「しまべん」など開催地の福祉文化活動を紹介した。2点目は、斬新な企画を試みたことだ。「テーマソング」「スタッフTシャツ」「手書き封筒」など過去の大会にとらわれず、実行委員会自身が楽しめる「小物」を考えた。結果としてホスピタリティとオリジナリティに富んだ大会として評価をいただいた。本当にうれしいことだった。
大会参加費を1500円としたことも特徴の一つである。その意図は、会費額を抑制し、一般（非会員）の参加を促そうとするものだった。多くの方に大会に参加していただき、あわよくば会員となっていたことも期待した。しかし会員の方の参加が多い大会でもあったことは、うれしい誤算であった（会員73人、非会員123人）。おかげさまで採算的にも赤字を出さずに決算できて安堵している。
以上、斬新さばかりを総括として述べたが、河東田会長はじめ役員の方にご指導ご助言をいただいた。とりわけ学会事務局には多大のご心配とご迷惑をかけた。また地元実行委員にもご無理をお願いした。皆様様に感謝申し上げます。倉敷大会のまとめとしたい。



スタッフTシャツ

テーマソングを披露♪

懇親会の余興も盛り上がりました

実行委員会 土屋英樹

総会にあわせて、「福祉文化実践学会賞」授賞式がおこなわれ「特定非営利活動法人マイハート・インターナショナル」(代表 熊木正則 氏)が受賞した。

特定非営利活動法人マイハート・インターナショナルは、様々な障害のある人の美術作品展である「福祉MY HEART展」を1986年から継続して開催している団体である。



受賞の喜びを話す熊木代表

岡山大の記念講演会や分科会、シンポジウム報告は2、3ページにまとめられています。

大原美術館レクチャーツアー

報告：松原 徹

岡山といえば倉敷。倉敷といえば、やはり大原美術館である。大原孫三郎と児島虎次郎の尽力によって昭和のはじめに作られた大原美術館。主な収蔵品にエルグレコ『受胎告知』（1700年頃）をはじめ数々の世界の宝ともいえる作品がある。それらがあるということ、倉敷が空襲から免れたこと、児島が収集する目的として、容易に世界に行くことができない日本の画家、また市民のために本物をみせる為であったこと等、二人が文化をもたらし、結果、大きな福祉的効果が産まれたことを、モノの『睡蓮』（1906年頃）、ピカソの『頭蓋骨のある静物』（1942年）を通じて学ぶことができ、その後、有意義な館内見学をすることができた。朝早かったので沢山の方々の参加を得ることはできなかったが、改めて大原美術館の持つ役割、それを作った大原、児島のことを感動した。日本福祉文化学会の全国大



大原孫三と児島虎次郎の思いに感動したレクチャーツアー

会を岡山で開くことを引き受けた時には、それほど思わなかったのだが、改めて大原美術館について学んだこと、岡山（倉敷）で開催する意味を、私自身、明確にすることができた気がするレクチャーツアーであった。

記念講演

報告：磯部幸子

「地域力と絆」〜福祉や文化は国境を越えてつながれる〜
講師 NPO法人「AMDA」
理事長 菅波茂氏

「AMDA」は現在30カ国に支部を持つ「国境なき医師団」です。世界の紛争や災害地域へ、医療を通して支援の輪を広げてきた。その中で理解したことは「相手のプライドに踏み込まない」こと。さまざまな被災者であっても「人は誰でも役に立ちたい」と思っています。「人権」とは「存在に対する尊敬」です。だから、名前を呼ぶこと、あなたに関心があると伝える事を大切にしています。また、「差別」とは意欲と能力があるのにチャンスを与えられないこと。人間にとって必要なことは喜び（自己実現・表現そして感謝）だと強く感じています。20世紀の「福祉」は弱者支援と自立でしたが、21世紀は、障害は進化なり、人々の能力の開発が大切だと感じています。

岡山には石井十次がおり、3,000人もの子どもたちを養育しました。それを支えたのが大原孫三郎。その精神は今でも受け継がれ、岡山の福祉環境は整っています。倉敷が空襲で焼かれなかったのは「大原美術館」の世界的な知的財産・文化（芸術）財産があったから。そういう意味でも福祉や文化は国境を越えてつながれるし大切にしていきたい。」

第4分科会 福祉の先人と 大原孫三郎

報告：山本浩史

まず、東洋大学菊池義昭氏「岡山孤児院史における大原孫三郎」では、大原が岡山孤児院に関与した時期を4つの区分で整理し、そこから、岡山孤児院の経営者、あるいは、石井の後継者としての姿を明確にした。

次に早稲田大学兼田麗子氏「大原孫三郎と山室軍平」では、石井や留岡幸助らが記された交流図、あるいは、大原が山室の日本救世軍に寄付をした領収書等から、その関係を明確にした。続いて、福山市立大学高月教恵氏「大原孫三郎と『若竹の園』創設の理念と実際」では、保育されずにいる子ども達に心を痛めた妻の思いから、大原が「石井記念愛楽園」の一環事業として「若竹の園」を設立したことが発表された。最後に岡山県立大学二宮一枝氏「大原孫三郎と済世顧問・原澄治の活動」では、旧倉敷町済世顧問の原の功績を紹介するなかで、原が大原にとって、重要な存在であったことを明らかにした。その後、ディスカッション、質疑等を行い、分科会を閉じた。



福祉の先人を語るパネラーの皆さん



菅波氏の示唆に富む話にひきつけられる参加者達

第1分科会 研究と実践の融合

報告：福山正和

研究と実践の融合では、現場での実践者は研究するという視点を持ちにくいことから、研究者から研究につなげていくという視点での意見を出いただき、研究者は現場からの乖離しないように現場の視点から意見をいただき、実践者と研究者の実施していることをより良いものにするというところで取り組まれました。実践者から、実際の書道教室の様子を写真で説明していただきながら、技術向上を目指すグループと社交を目的とするグループがいること、また、利用者の方が主体的に積極的に取り組めるような工夫をされていることが報告されました。研究者から、高齢化が進んだ公営住宅に住む高齢者と同じ地域に住む高齢者の質問紙調



研究と実践の融合を確認

第2分科会 地域文化の 福祉的実践

報告：多田千尋

福祉と地域文化の融合を図ることを目指して4年前に開設された分科会。多世代に光を当てた山陽地域のすぐれた実践が寄せられた1つ目に報告では、備中子ども神楽の実践を通して、人間関係が希薄になりがちな地域のお祭りや老人施設へ慰問をすることによって、世代を超えた人々との交流や郷土への深い愛着と関心が育まれていくことの可能性が報告された。次は、笠岡諸島

シンポジウム 『倉敷から発信する 地域の絆』

報告：島田治子

大会2日目のシンポジウムでは「コラボレーション」をキーワードに、地域に根ざした独自の活動を3人のパネリストが語った。

まずはコーディネーターであり、山陽新聞社編集局次長の横田賢一さんが新聞記者としてみてきた「福祉岡山」を概説した。一人目のパネリストは「倉敷町屋トラスト」の中村泰典代表理事で、伝統的建造物が立ち並ぶ保存地区に「あかりを灯す」活動をしている。企業とコラボしながらイベントや伝統行事を開催してあかりを灯す、来訪者に町屋生活体験をしながら滞在してもらってあかりを灯す、商店や事業所、門灯・看板のあかりを灯すなど、伝健地区を明るく活力のある町にする試みを紹介した。

二人目は発達障がいと精神障がいの当事者である加藤剛さん。精神障がいの当事者が活動する「岡山マインド「こころ」」で「テーブルまび」（真備地域自立支援協議会）の運営に携わったり、講演活動をしたりしている。「テーブルまび」は当事者やその家族、地域住民、行政関係者など、さまざまな立場の人々が集い、話し合いながら自立支援を行っている。また「岡山マインド「こころ」」には、ケアホームと地ビールの醸造・販売所をセットにして立ち上げるといふユニークなコラボもある。

最後は、世界的な銘柄となった「桃太郎ジーンズ」の生みの親である「藍布屋」代表取締役の真鍋寿男さん。感動する心を武器に、日本の青（藍）色を追求し、さまざまな産地とコラボしている。倉敷市の南東部に位置する児島から世界への挑戦を始め、会社だけでなく児島全体をジーンズパネラーと呼ばれるまでに育て上げた。

以上3人のパネリストの話を聞いていて気がついたのは、それぞれが「他者の視点」を持ち、新しい切り口で活動していることだ。福祉の課題も全く新しい視点でのコラボレーションができたときに解決へのヒントが手に入るのではないかとコメントし締めくくりとした。



倉敷発地域の絆を確認したシンポ

第3分科会 災害支援と 福祉文化

報告：石田昌司

本学会では災害支援を活動の一つの柱に「災害と福祉文化」委員会を作って活動している。今回分科会と



地域文化と実践活動を聴く

の食文化「しまべん」が地域の食文化を通してコミュニティ再生となっている事例が報告され、島の高齢化率は55%を超えたことで、住民が行政と協働して島民組織を立ち上げたたくましく事例であった。そして最後に、障害者就労支援センターオリンピア岩屋の地域文化とコミュニティをテーマに、兵庫産の木材を使って、発達に障害を持つ子ども達が遊びながら学習できる教材や、知的好奇心を刺激する木のおもちゃ作りが報告された。

いずれの報告も、自然や文化といった地域資源を見事に活用していく住民、市民のすぐれた実践であり、新しい時代に必要ならソーシャルキャピタルの理想系をうかがい知る事ができる秀逸の活動報告であった。



実践を通じ災害支援のこれからを考える

して、学会としての活動、被災者支援のための福祉文化的アプローチについて話し合った。

①子どもや高齢者への遊び支援を、グッド・トイ委員会の馬場清さんが報告。避難所や仮設住宅での息詰まるような雰囲気、「おもちゃ」がぶち破ってくれたという生々しい体験を示してくれた。学会としても取り組んだ「おもちゃボックス」「福祉文化ボックス」の活動の意義がわかりやすく提供された。

②現地に半日間住み着いて、主にサロン活動支援をした川井太加子（桃山学院大学）さんの報告では、孤立しがちな被災者が集うことによって、仮設住宅集団が組織化された「地域」づくりにつながっていくことを示してくれた。

③被災地でなく、居住地でできる福祉文化的支援活動を、津波で流された写真の修復や、高校生が参加した木材を使った生活用品づくりなどの事例を挙げて、倉敷市社会福祉協議会の渡辺和博さんが報告。地域に根差した社協の底力のすごさが伝わってきた。

フロアからの意見で印象的だったのが、高齢者や子どもへの支援はわかりやすいし、やりやすいが、大人の男性への視点が忘れられていると